

2015年3月31日

カンバーランド長老キリスト教会日本中会

神学・社会委員会委員長 瀬底正博

辺野古基地建設に強く反対します

カンバーランド長老キリスト教会日本中会は、辺野古における米軍の新基地建設に強く反対し、ただちに工事を中止することを日本国政府に求めます。

地元沖縄では、昨年1月から12月にかけて、名護市長選挙、名護市議会議員選挙、県知事選挙、県議会議員補欠選挙、那覇市長選挙、衆議院議員選挙と、そのすべてにおいて新基地建設反対という市民の意志が明らかにされています。それにも拘わらず、日本国政府は基地建設を強行しようとしています。キャンプ・シュワブのゲート前や辺野古の海上では、市民たちによる建設反対の平和的な行動が行なわれていますが、それに対して、海上保安庁や機動隊による暴力的な弾圧が加えられています。果たしてこれが民主主義の国であると言えるでしょうか。

70年前、アジア太平洋戦争の末期に、沖縄は「本土防衛のための捨て石」とされ、凄惨を極めた沖縄戦では20万人を超える戦死者が出たと言われます。餓死、住民虐殺、集団自決などを含めた一般住民の犠牲者を考えると、県民4人に1人が戦没したことになります。戦後も、沖縄は日本の犠牲とされ続け、構造的差別を受けており、現在も、国土の僅か0.6%に過ぎないこの県に米軍基地の74%が押し付けられています。「世界一危険な基地」と言われる普天間基地には、市民の反対を無視して垂直離発着輸送機オスプレイが配備され、周辺に住む住民は日々、危険と騒音にさらされて苦しんでいます。わたしたちは今、沖縄を長く苦しめてきたことを悔い改め、「基地建設反対」を訴える沖縄県民の方々に強く連帯し、平和の島沖縄を取り戻すために声をあげます。

普天間基地の「移設」という名目で、普天間基地にはない軍港や貯蔵庫の機能を兼ね備えた巨大な基地を辺野古に建設することは、「沖縄の負担軽減」にはなりません。新たな重荷を加えるだけです。また、米軍関係者も認めているように、米軍基地の存在は沖縄を防衛するためのものではなく、むしろ攻撃の標的となることによって危険を招き寄せるものです。しかも海を埋め立ての滑走路建設は、生物多様性を誇り、希少なジュゴンも棲む美しい海を破壊するものであり、生態系への深刻な影響という意味でも、到底容認できるものではありません。

平和を実現する者として生きることを志すキリスト者として、また、日本国憲法の保障する基本的人権の尊重と平和主義を重んじる市民として、わたしたちは辺野古への新基地計画の即時中止を訴えます。